

Title	中英語宗教文学における予定説の解釈と受容に関する研究
Sub Title	Predestination and free will in middle English religious writings
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami)
Publisher	
Publication year	2021
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2020.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本研究では、13世紀後半～16世紀初頭にかけて中英語で著された宗教文学作品を対象として、キリスト教の「予定説」がいかに論じられているかについて調査した。その結果、予定説について神学的な解説を試みる英語作品が存在する一方で、救済における自由意志の役割を強調して、あえて予定説には触れない傾向も一般信徒や修道女を対象とした作品に認められることが明らかとなった。さらに、ナラティブ文学における予定説の主題化について、チョーサーを対象として研究し、一般信徒にとって難解な、予定と自由意志の表面的矛盾の問題に対して、ひとつの回答が試みられていることを明らかにした。</p> <p>This study explored the reception of the doctrine of predestination in Middle English religious writings composed between the 13th and the early 16th centuries. While there are a few Middle English texts that try to elucidate predestination from a theological angle, there are several texts intended for the laity or nuns, where the issue of predestination is consciously evaded in view of the didactic emphasis on the free will at salvation. This study also dealt with the reception of the doctrine of predestination in narrative texts, especially in Chaucer; it could be argued that Chaucer tried to answer the difficult issue of the apparent paradox of predestination and free will.</p>
Notes	研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2016～2020 課題番号：16K02460 研究分野：英文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_16K02460seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02460

研究課題名(和文) 中英語宗教文学における予定説の解釈と受容に関する研究

研究課題名(英文) Predestination and Free Will in Middle English Religious Writings

研究代表者

松田 隆美 (Matsuda, Takami)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：50190476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、13世紀後半～16世紀初頭にかけて中英語で著された宗教文学作品を対象として、キリスト教の「予定説」がいかに関論じられているかについて調査した。その結果、予定説について神学的な解説を試みる英語作品が存在する一方で、救済における自由意志の役割を強調して、あえて予定説には触れない傾向も一般信徒や修道女を対象とした作品に認められることが明らかとなった。さらに、ナラティブ文学における予定説の主題化について、チャウサーを対象として研究し、一般信徒にとって難解な、予定と自由意志の表面的矛盾の問題に対して、ひとつの回答が試みられていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋中世において、運命は神の計画によってあらかじめ定まっているとする予定説と個人の自由意志の関係性は、死後の救済と直接関わる本質的課題であるが、神学的素養の無い一般信徒には難しい論点である。本研究は、中世後期に英語で書かれた主に一般信徒向けの宗教文学において、一見矛盾するようにみえるこの論点がいかに説明されているか(あるいは避けられているか)を分析した。そこには、教義を正確に教えることと、信徒を改悛と救済へと導くという実践とのあいだの葛藤が具体的に認められるが、それは教化や教育における普遍的な課題で有り、歴史的事例を扱った本研究はそのためにひとつの視座を提供する。

研究成果の概要(英文)：This study explored the reception of the doctrine of predestination in Middle English religious writings composed between the 13th and the early 16th centuries. While there are a few Middle English texts that try to elucidate predestination from a theological angle, there are several texts intended for the laity or nuns, where the issue of predestination is consciously evaded in view of the didactic emphasis on the free will at salvation. This study also dealt with the reception of the doctrine of predestination in narrative texts, especially in Chaucer; it could be argued that Chaucer tried to answer the difficult issue of the apparent paradox of predestination and free will.

研究分野：英文学

キーワード：中世英文学 西洋中世 予定説 自由意志 キリスト教思想

1. 研究開始当初の背景

第4ラテラノ公会議(1215)から宗教改革期に至る、13世紀後半～16世紀初頭のイングランドにおいて、救済における「予定説」(praedestinatio)と自由意志との関係は、多くの神学者によって取り上げられた神学的論題であった。人間の運命は神の摂理のもとで予め定められているとする「予定説」は、その根拠を聖書に遡る、キリスト教の基本教理のひとつである。中世の予定説は、救済される者と地獄落ちする者の両方があらかじめ「予定されている」とする、カルヴァンに代表されるプロテスタントの二重予定説ではない。アウグスティヌスは『エンキリディオン』において、一部の者が選ばれて神の恩寵により永遠の生へと定められる一方で、選ばれない者は、神に見捨てられたのではなく、自らの意志で滅びを選んだと主張している。また、トマス・アキナスは、神の意志には、全ての理性的被造物の救済を意図する先行的意志と、それぞれ特定の状況下にある被造物に個別に向けられる帰結的意志の2つがあり、後者においては個人の意志が働く余地を認めている。

両者共に予定説と自由意志を共存させる解釈を展開しているが、そのための論理を、神学的素養のない平信徒に俗語で説明することは容易ではない。平信徒の教導においては、予定説には触れずに、神からの贈り物である自由意志のみに焦点を当てて、救済も滅びも自己責任であるとして信徒の悔悛を促すほうが分かり易く、実際こうした単純化は中英語の教訓詩においてはしばしば見られる。

しかしその一方で、全てのキリスト教徒が年に1回罪を告白することを命じた第4ラテラノ公会議以降、信徒が自ら自己分析をして罪を認識できるように、平信徒(そして彼らを教導する任にある教区司祭)に基本教義を英語で教える必要が生じた。その目的のために、聴罪手引書、キリスト教道徳をまとめた大全、カテキズムの注解書などがラテン語から(時にアングロ・ノルマン語を介して)英語に翻案され、同時に新たに英語でも著された。これらは、カテキズムに基づいて基本教理の全体像を教える目的も有しており、神学的な論点も取り上げている。さらに、14世紀後半には英語を用いて高度な神学的議論を展開する「俗語神学」作品も増加し、それらは、1409年のアランデル教令以降も読書対象として流通していたことが指摘されている。こうした作品においては予定説も取り上げられ、この複雑な教義を平信徒に教えるためのさまざまな方策が認められる。予定説と自由意志の関係は死後の救済と直接関わる論題であり、その正しい理解を平信徒に授けることは、信徒はいかなる姿勢で救済へと向かうべきかという、平信徒の教化と直接に関わる根本的課題だったと言えるのである。

このように予定説は、中世の宗教文学史においてもキリスト教思想史においても重要な研究課題であるにもかかわらず、オッカムやウィクリフなど個別の思想家を対象とした比較的少数の思想史的研究が存在するにとどまっており、特に予定説の俗語(特に英語)での扱われ方についてはほとんど研究されていない。中英語の世俗文学への影響についても、*Troilus and Criseyde* の分析において predestination をキーワードとした研究論文が数点あるのみで、本研究開始当初においては、テーマの重要性にも関わらず等閑視されていた。

2. 研究の目的

本研究は、未刊行のものも含む13世紀後半～16世紀初頭の中英語の宗教文学作品における「予定説」(praedestinatio)および自由意志に関する記述を、写本間の異同を含めて収集し、それを写本固有の読者層や編纂方針と関連づけて分析する。この神学的論題が、必ずしもラテン語を介さない読者層(平信徒や教区司祭)のあいだで、いかに変容しつつ受容されたかを文学史および書物史の視点から跡付けることで、中世後期イングランドにおけるキリスト教教義の教授と伝播の実体を具体的に明らかにすることが目的である。研究には以下の3つのフェーズがある。

(1) 中英語で記された宗教文学における用例の収集。予定説と自由意志についての本格的な解説が見いだされるのは、第4ラテラノ公会議以降に編纂された大全やカテキズムの注解書においてだが、これらについては未だ校訂も研究も不十分である。本研究は、この未開拓分野における主要作品の解題と部分的校訂もひとつの目的とする。

(2) 個別例の分析において、写本固有の制作事情に注意を払い、写本間の異同および(翻訳テキストの場合は)ラテン語あるいはフランス語原典との差異を記録し、その意義を写本固有の読者層や編纂方針との関連で明らかにする。

(3) (1)(2)の調査結果に基づき、13世紀後半から16世紀初めまでの中英語宗教文学を対象として、予定説と自由意志に関する記述を辿り、その特徴をテキストのジャンルや写本の読者層に関連づけて分析し、俗語神学の文脈において、予定説と自由意志をめぐる議論が、神学的

議論と実践的教訓との中間点で揺らいでいた様を明らかにする。さらにその結論を応用して、ラティブ文学における予定説と自由意志の主題化について、個別研究を行う。

3. 研究の方法

(1) 1次資料の分析方針

中英語の宗教文学を対象として、(a) 予定説と自由意志に関する記述の収集、(b) 未刊行テキストを対象とする場合には該当箇所のトランスクリプションと校訂、(c) 該当箇所が含まれる作品についての写本単位の読者層および編纂方針の分析、をすすめる。英語作品が、ラテン語やフランス語からの翻訳やパラフレーズである場合は、ソースとなるヴァージョンもあわせて調査し、差異を記録する。また、個々のテキストについて、写本におけるコンテクストを確認し、写本間の差異も記録する。

(2) 調査対象および分析の視点

調査対象を、作品の機能や制作理由により、総括的なキリスト教教義の大全、ディヴォーショナルな教化文学、説教、神秘主義文学、ウィクリフ派文学とそれに対抗する正統派作品の5カテゴリーに整理して、順次調査を進める。

総括的なキリスト教教義の大全 - 第4ラテラノ公会議(1215)の教令、およびそれに基づいてイングランドで発布されたランベス司教令(1281)を反映して編纂された、総括的なキリスト教教義の大全について、該当箇所の収集と、それらが含まれている作品の写本についての書物的調査、さらに写本間の異同の記録をすすめる。主要な調査対象の作品は以下の通りである。オルレアンのラウレンティウス作 *Somme le roi* (1279) のアングロ・ノルマン語原典及び複数の中英語バージョン (i.e. *The Azenbite of Inwit* (1340), *The Book of Vices and Virtues* (c.1375)、ウィリアム・オヴ・ナシントン作 *Speculum vitae* (14世紀前半) *A Myrour to Lewed Men and Wymmen* (14世紀後半 - 15世紀初期) *ロバート・マニング*作 *Handlyng Synne* (c.1270)、*ジョン・マーク*作 *Instructions for Parish Priests* (c.1380-90) *The Lay Folks' Catechism* (1357)、*Speculum Christiani* (c. 1350)、*Memoriale Credentium* (15世紀初頭) *The Pricke of Conscience* (c.1350)、*Dives and Pauper* (c. 1405-10)、*エドモンド・オヴ・アピンドン*作 *Speculum Ecclesie* (15世紀の英訳及び13世紀初頭のラテン語原典)。

ディヴォーショナルな教化文学 カテキズムの解説にディヴォーショナルな要素を付け加えた作品として、*The Chastising of God's Children* (1390年頃)、*ハインリッヒ・ゾイゼ*作 *Horologium Sapientiae* (14世紀前半) の中英語訳 (およびラテン語原典) *ウィリアム・フリート*作 *De Remediis contra Temptationes* (1352-8)、*the Holy Boke Gracia Dei* (14世紀後半)、*The Ladder of Foure Ronges* (15世紀)、*A Book to a Mother* (14世紀後半) を主たる対象とする。

説教 1年のサイクルおよび単独で現存する14~15世紀の中英語説教を、*O' Mara and Paul, Repertorium* (2007) を活用して調査し、また、*South English Legendary* (13世紀後半) に代表される説教の要素を含んだ聖人伝集もあわせて調査する。

神秘主義文学 14世紀後半のリチャード・ロウルとウォルター・ヒルトンの英語散文を中心に、修道院文学が平信徒の読書対象として受容されていく過程に特に注目しつつ、予定説と自由意志に関する記述を分析する。

ウィクリフ派文学とそれに対抗する正統派作品 ロラード派の主張を明確なかたちで反映したテキストとしては、*Twelve Conclusions of the Lollards* (14世紀末) に代表される教義上の論点集、ロラード派のカテキズム概説書である *The Lantern of Light* (1409-14)、さらにロラード派の説教集を調査し、同時に、ロラード派に対抗することを意識して制作された正統派の作品として、*ジョン・マーク*の祝日説教集 *Festial* (c.1390)、*レジナルド・ピーコック*作 *The Reule of Christian Religion* (15世紀前半) を取り上げ、予定説の解説における両者の視点の差異を明確化する。

4. 研究成果

(1) 「研究の方法」で記した5つのカテゴリーに基づいて、中英語で記された宗教文学において予定説と自由意志が扱われている箇所を集め、傾向を分析した。もっとも用例が多いことが想定された「第4ラテラノ公会議(1215)後に編纂された「総括的なキリスト教教義の大全」においては、*Dives and Pauper* (c. 1405-10)、*The Book to a Mother*, *The Lucidarye*において、特に詳しい記述や言及が見いだされた。ディヴォーショナルな教化文学および説教文学においては、特に *The Chastising of God's Children* (1390年頃) およびその関連作品である *The Prickyng of Love (Stimulus amoris)* の中英語版において、予定説へに関してかなり専門的な解説が見いだされる一方で、平信徒の教導に配慮してあえて予定説に触れないという、一見矛盾

する傾向も認められた。14世紀において独自の予定説を展開している、ウィクリフと Julian of Norwich についてもその論点を整理した。

(2) カテキズム的性格を持つ未刊行作品の調査と校訂 - ロンドン大英図書館において、14-15世紀の中英語およびラテン語による未刊行宗教散文の写本 (MS Royal 8. F. 7, MS Arundel 507, MS Addit. 22270) を精査し、カテキズムに関する小論を含む未刊行散文作品の転写をおこなった。たとえば *Baculus viatoris* (MS Royal 8. F. 7, fols 45v-51v) はラテン語散文だが中英語の引用を含む、カテキズム提要である。しかし、英語を部分的に使用してポイントを要約するやり方は、明らかに一般信徒を念頭においている。こうした部分的に中英語を含むラテン語の教化文学も調査対象に含めたことで、予定説の一般信徒による受容に関して複数のチャンネルが存在し、俗語のみの分析からでは十分に見えてこない複雑さ 多様な読者層にあわせて複数言語を使って教化するという柔軟な対応 - - が具体的に明らかになった。

(3) ラテン語原典および中世フランス語版との比較研究 - 1100年より少し前にイングランドで記されたとされる *Elucidarium* は、ラテン語原典のみならずフランス語や英語でも流通したポピュラーなキリスト教教義の入門書で、予定説についてかなり詳しい議論を含んでいる。中英語版の *The Lucidarye* を、はラテン語原典および複数の中世フランス語と比較した結果、意図された読者層と作品の機能が変化するにつれて、予定説に関する解説も変化し、自由意志との表面的矛盾を回避すべく簡略化されていることが明らかとなった。

(4) 中英語ナラティブ文学における予定説の主題化 - 宗教文学の調査によって見えてきた予定説の受容をめぐる傾向を下敷きとして、中英語のナラティブ文学において予定説がいかに主題化されているかについて、作品を絞って個別研究を進めた。特に、Geoffrey Chaucer 作品における予定説に注目した。チョーサーは、特にアウグスティヌス、ボエティウス、ブラッドワルドインの予定説について熟知していて、*Troilus and Criseyde* や 'Nun's Priest's Tale' において具体的に言及している。しかし、予定説はむしろ、直接の言及がない 'The Man of Law's Tale' や 'The Second Nun's Tale' といった宗教的なナラティブにおいて意識的に主題化されていることが明らかとなった。チョーサーは、14世紀の予定説をめぐる神学的論争を念頭におきつつ、こうした宗教ナラティブ作品において、予定と自由意志の表面的矛盾の問題に対して、ひとつの回答を提示していると結論づけられる。

中世文学研究において予定説はこれまでほとんど論じられてこなかったため、予定説をめぐる以上の研究成果を論文や学会発表により国内外に発表したことはそれ自体有意義であり、加えて、平信徒の教化のために教義的妥協が必要となる論題を取り上げたことで、キリスト教教義が平信徒へと伝播し、民衆レベルのキリスト教信仰として受容されるプロセスとそこで生じる諸問題が具体的に明らかとなった。

また、新型コロナウイルスの影響で2020年3月に予定していた海外出張を中止せざるをえなかったため、研究期間の延長を余儀なくされたが、出張により予定していた資料調査や打合せについては、デジタルコンテンツや遠隔会議により代替できたことを付記する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Matsuda, Takami	4. 巻 91/92
2. 論文標題 A Small Didactic Florilegium in MS Takamiya 15	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Poetica	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 MATSUDA, Takami	4. 巻 32
2. 論文標題 Palmer and corpus mysticum in the Canterbury Tales	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Studies in Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 MATSUDA, Takami	4. 巻 1
2. 論文標題 The Ravishment of Body and Soul in the Friar's Tale and the Summoner's Tale	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Spicilegium: Online Journal of Japan Society for Medieval European Studies	6. 最初と最後の頁 28-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 MATSUDA, Takami	4. 巻 113-2
2. 論文標題 Lie and Fable in Chaucer's Manciple's Tale	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takami Matsuda	4. 巻 51
2. 論文標題 Performance, Memory, and Oblivion in the Parson's Tale	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The Chaucer Review	6. 最初と最後の頁 436-452
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 松田隆美
2. 発表標題 Chaucerと予定説
3. 学会等名 日本英文学会第91会大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takami Matsuda
2. 発表標題 Predestination in Middle English religious writings for the laity
3. 学会等名 The XI Cardiff Conference on the Theory and Practice of Translation in the Middle Ages (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 松田隆美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾図書館	5. 総ページ数 159
3. 書名 究極の質感 (マテリアリティ) - 西洋中世写本の輝き	

1. 著者名 松田隆美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 247
3. 書名 チヨースー『カンタベリー物語』 - ジャンルをめぐる冒険	

1. 著者名 松田隆美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ぶねうま舎	5. 総ページ数 294
3. 書名 『煉獄と地獄 - ヨーロッパ中世文学と一般信徒の死生観』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 International Workshop on Medieval and Early Modern English Literature	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 International Workshop 2017- The Boke of Gostely Grace: The New Edition and its Devotional Context	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 International Symposium 2017- Mechthildof Hackeborn's Liber specialis gratiae: The Idea of its Middle English Translation and Oxford, Bodleian Library, MS Bodley 220	開催年 2017年～2017年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------